

## 序

ゴロヴニン艦長の手記に繰り返し言及される、海軍中尉フヴォストフとダヴィドフは、かれらが引き起こした日本人への不正で認可も受けていない攻撃によって、ゴロヴニン艦長とその同胞を幽囚へと導くことになった。読者がこの士官たちにあまり好ましくない意見を持たれることも、自然なことである。君主である皇帝を頂く平和な国家に対し、そのような行為に及ぶ、いかなる付与された権限もなく、何がかれらを敵対行為に向かわせたのか。この士官たちは兩人とも、生前には自分たちの行動を公に説明せず、ダヴィドフはきわめて断片的なメモ書きを残しているが、それを理路整然としたものにするのにはもつと時間が必要になるだろう。本件について私達がこれまでに得た唯一の情報源は、フヴォストフとダヴィドフの一回目の遠征の報告記に、シシュコフ副提督<sup>\*</sup>〔当時〕が寄せた序文である。氏はこの報告記をダヴィドフのメモ書きから編んだが、この序文からうかがえるのは、この二人の青年が非の打ち所がない士官たちであったということである。二人は日本への敵対遠征を計画し、それを実行に移す詳細な指示を与えたレザノフ氏から直接命令を受ける立場にあり、二人にはその計画が皇帝の御前に置かれ、政府の承認を受けたと信じるに足る様々な理由があった。それどころかシシュコフ提督は、レザノフが皇帝と〔商務相〕ルミャンツェフ伯に本件についての上奏書を送ったと述べた時、二人を欺いたのだとも述べていない。我々が知る限りにおいては、上奏書を受け取った両者は、本計画を承認していたかもしれないとも思える。それは少なくとも、本件におけるフヴォス



A. S. シシュコフ (1754-1841)

トフとダヴィドフの行動に対し、ロシア政府が取り立てて咎めていない事実からもあきらかであると提督はいう。わが読者はきつと興味を持って、この二人の青年の報告を詳細に見ることになるだろう。そしてその奉仕から祖国を奪った不幸な出来事に涙するだろう。シシュコフ提督が序文を寄せた旅行記から、最も興味深い点をいくつか書き出してみよう。

\*〔訳注〕アレクサンドル・セミョノヴィチ・シシュコフ (Александр Семёнович Шихов 一七五四—一八四一) 提督、政治家、文献学者、作家、言語学者。ロシア帝国科学アカデミーの総裁(一八一三—一八四一)、文部大臣(一八二四—一八二六)を歴任した。『三ヶ国海軍辞典』の著作がある。ダヴィドフと生活を共にした時期は、公職を離れ、文学上の

ある組織を設立しようとしていた。

## 第一回航海

名誉への燃えるような情熱

ニコライ・アレクサンドロビッチ・フヴォストフは  
一七七六年六月二十八日、発事官の息子として生まれ、